



『Unnamed Memory』 『このライトノベルがすごい！ 2020』単行本第1位

電撃の新文芸(レーベル名です)より

1～4巻発売中。

文:古宮九時 画:chibi

「陛下、お妃候補の釣り書きが来ておまして…」

そう言いながら執務室に入ってきたラザルは、主人の執務机を見た瞬間、硬直した。

そこには黒い子猫がちよこんと座っており、じっとラザルを見つめている。その大きな目に既視感を覚えたラザルは、恐る恐る尋ねた。

「ティ、ティナーシャ様ですか……？」

「なんで猫がティナーシャなんだ。疲れてるのか？」

呆れたように返したのは、執務をしているオスカーだ。主人の言葉にラザルはいくらか胸を撫で下ろした。

「いえ、何となくそんな気がしまして……」

オスカーの呪いを解くために、隣国トゥルダールからやってきている女。傾城の美女であり絶大な力を持つ魔法士のティナーシャは、オスカーに一方的な好意を向けているのだ。

もちろんトゥルダールの次期女王である彼女の好意が叶うことはない。彼女自身それをよく弁えており、ただ拾われた子猫のような感情を隠しきれていないだけだ。

そんな彼女がオスカーの縁談について知ったら、さぞ笑顔の表面の下で荒れ狂うに違いない。また窓が割られる。

だからこそラザルも黒い子猫を見て用心したのだが、どこことなくティナーシャに似た子猫は、当たり前だが彼女自身ではないようだった。

オスカーは黒い子猫の頭を撫でる。

「この猫はティナーシャが置いて行ったんだ」

「やっぱりティナーシャ様じゃないですか!？」

「いやだからなんで猫がティナーシャなんだ……。連れてたから触らせてくれ、と言ったら置いてった」

「生き物を軽く言わないでくださいよ。ティナーシャ様、猫なんて飼っていらっしやいましたか？」

「さあ？ あいつのことは常識で測れないからな。それよりなんだって？ 釣り書き？」

ラザルは不安を抱きながらも、主君にそう言われて抱えてきた釣り書きを渡す。その様を黒猫はじっと見ている。じっと見られていてとても落ち着かない。

オスカーは三冊ある釣り書きをばらばらと捲った。

「こういうのの肖像画ってどこまであてになるんだろうな」

「ならないと思いますよ。そりゃ皆様美化して描かれますし」

「顔で選ばないからつけなくてもいいんだけどな。経歴と技能くらい書いてあれば」

「文官採用みたいに仰らないでくださいよ。夢とか打算とかそれぞれお持ちなんですよから」

「権勢欲が強くない家がいいな。面倒事が少ない」

「そういう家のご息女は、そもそも望まれもしないのに釣り書きを城にお送りになりません」

身もふたもない話を、黒い子猫はじっと聞いている。どこか主人を思わせる闇色の目をオスカーは見返した。

「まあ、ティナーシャに勝てる女はいないな。あれは最上だ」

それは、オスカーにとっては戯言で、だが正直な気持ちなのだろう。彼女自身の前では決して口にしない言葉だ。

ラザルは軽く目を睨り、だが沈黙を保つ。彼女はこの城を去っていく人間なのだ。だから何も言えることはない。

そうして一時間もした頃、執務室の扉が叩かれる。

「オスカー、猫を回収に来ました」

現れたティナーシャは子猫を手招く。たちまち黒い子猫は宙を駆けると、彼女の肩の上に収まった。普通の猫ではないその動きにオスカーとラザルは目を丸くする。

「なんだ今の。ただの猫じゃないのか？」

「違います。普通の猫はこんな大人しくありませんよ。魔法で作った使い魔です。見聞きしたものを後で私と同期したりできるんですよ」

「そうか。今すぐ猫の記憶を消せ。今すぐにだ」

「なんで!？」